



Title	蘇軾詩における自注
Author(s)	山上, 恵
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2012, 46, p. 33-48
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/27236">https://hdl.handle.net/11094/27236</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 蘇軾詩における自注

山上 恵

キーワード：蘇軾、自注、『東坡集』

## 一・はじめに

作者自身が自らの詩や文のなかで語られた内容を補足説明する自注は、作品を解釈する際に重要なものとなる。自注を取り扱った先行研究に、赤井益久「自注の文学——『元氏長慶集』を中心として——」<sup>(1)</sup>がある。その中で、

王逸が『楚辭』施注の際に自作「九思」に注した例や謝靈運が「山居賦」に自注した例などが先蹟としてみとめられるものの、自注の例はきわめて少ない。唐代にても、王維や李賀に制作した年齢を記す僅かな自注があるほか、『全唐詩』が所収する杜甫編の「原注」には自注が多く混淆している等は稀な例といつてよい。

と、自注を施す例が少なく、中唐の元稹・白居易の自注の多さを特異なものであるという。元稹の自注のなかでも特に作品内容と自注が密接に関係する自注について、赤井氏は長篇の作、白居易との応酬唱和の作に比較的多く、樂府や寓言的作品に施されることとは少ないと指摘する。また、赤井氏は元稹の自注を、制作者の備忘のものという

よりも、読者のために詩本文を補完するものとして捉えるべきもので、「元白閒の唱和の實際と文集編纂の意圖とは切り離すことはできない」という。

では、北宋期に自注はどのように記されたのだろうか。今回は蘇軾自編『東坡集』<sup>(2)</sup>を対象とし、卷一から卷十九に収録された詩に小字で記された注について検討してゆきたい。『東坡集』の蘇軾詩に付された小字の箇所は四百四十五個ある。<sup>(3)</sup>これらがすべて蘇軾によつて付されたものかどうかという問題もあるが、今回はひとまず、小字で表記されているものは全て蘇軾の手によるものだと判断する。<sup>(4)</sup>

## 二、蘇軾自注の分類

『東坡集』にみえる詩の自注を、本稿ではその内容から、(a) 蘇軾自身に関する注、(b) 他者に関する注、(c) 土地に関する注、(d) 風俗に関する注、(e) 文物に関する注、(f) 典拠に関する注、(g) 音釈に関する注の七つに分けた。<sup>(5)</sup>

### a 蘇軾自身に関する注

蘇軾自身に関する注とは、蘇軾の経験や回想、詩作の情況に関するものなどが書かれたものである。

代表的な例としては「畫魚歌」詩（『東坡集』卷四、『蘇文忠公詩合註』卷八所収。以下『東坡集』を東、『蘇文忠公詩合註』を合と略記し、所収の巻数を記す）の題下注、「湖州道中作（湖州道中の作）」のように制作場所を記したもの、「送牛尾狸與徐使君」（東十二、合二十一）詩の題下注「時大雪中（時大雪の中）」など制作時の天

候を記したものがある。ほかに、「次韻章傳道喜雨」（東七、合十三）詩の「前時渡江入吳越、布陣橫空如項羽」句の注「去歲錢塘見飛蝗自西北來。極可畏（去歲 錢塘 飛蝗西北より來たるを見る。極めて畏るべし）」のように、その当時の行動や状況が書かれるものもある。

次に、「書晁補之所藏與可畫竹三首 其三」詩（東十六、合二十九）の「吾詩固云爾、可使食無肉」に付された句の注、「吾舊詩云『可使食無肉、不可居無竹』（吾が旧詩『肉無きを食はしむるべし、竹無きに居るべからず』と云ふ）」や、「送淵師歸徑山」詩（東十一、合十九）「為言百事不如人、兩眼猶能書細字」の句の注、「……余舊詩云『問龍乞水歸洗眼、欲看細字銷殘年』（……余の旧詩『龍に問ふて水を乞ひ 帰りて眼を洗ひ、細字を看 残年を銷さんと欲す』と云ふ）」のように、過去に自分が作つた詩を自注で示す例もある。

### b 同時代の他者に関する注

次に、蘇軾以外の他者についての自注を挙げる。これは、（a）蘇軾自身に関する注とは異なり、他者の情報が記されたものである。ここでいう他者とは、蘇軾と同時代の人物に限り、古人は除く。

最も単純なものとして、詩中に人物名が記されるとき、その人物に関するより詳しい情報を補うものがある。例えば「贈王仲素寺丞」詩（東八、合十五）の題下注「名 景純」のように名を補つたものである。「和王旂二首」詩（東十四、合二十四）の題下注「旂、平父子（旂、平と父子）」のように、家族関係の情報を記したものもある。また、相手の詩句や、その内容を記したものがある。「答任師中次韻」詩（東三、合八）の題下注「來詩勸以詩酒自娛（來詩 詩酒を以て自ら娯むを勧む）」は、任師中との間で詩の応酬をするなかで、彼の詩を下敷きにして

詩を作る際のものであり、簡潔に相手の詩の概要をまとめている。「次韻劉貢父李公擇見寄」二首 其一 詩（東七、合十三）の「歲惡詩人無好語」句の注も「公擇來詩皆道吳中飢苦之狀（公擇の來詩 皆 吳中飢苦の状を道ふ）」と、「來詩」の概要を提示する。また、「和文與可洋川園池三十首 二樂樹」詩（東七、合十四）「仁智更煩訶妄見、坐令魯叟作瞿曇」句の注に「來詩云『二見因妄生』（來詩『二見 妄に因りて生ず』と云ふ）」と、「來詩」の詩句を引用し、文同の「守居園池雜題三十首」詩に據つて作ったことを示している。

「孔長源挽詞二首 其二」詩（東七、合十三）「潮聲夜半千巖響、詩句明朝萬口傳」注「長源自越過杭夜飲有美堂上聯句。長源詩云『天日遠隨雙鳳落、海門遙蹙兩潮趨』」一坐稱善（長源 越より杭を過ぎり 夜 有美堂上に飲みて句を聯ぬ。長源の詩に云ふ『天日 遠く双鳳の落つるに隨い、海門 遙かに両潮の趨くに蹙まる』と。一坐善しと称す）」は孔延之の詩のエピソードを詩中に盛り込み、注でその背景、詩句を紹介する。これらの注には蘇軾とその相手の詩の応酬や宴席での詩など、社交上の情報が含まれる。

### c 土地に関する注

統いて、土地に関する注を挙げる。地名、位置情報、その土地の由来や故事などもここに含め、邸宅や道觀などの建物に関する注もここに分類した。主に蘇軾がその土地を訪れた際に作った詩や、贈答の相手が居る場所について触れた詩のなかにみられる。「渼陂魚」詩（東一、合五）の題注「陂在鄂縣（陂 鄂縣に在り）」は、陂の所在県を示している。「樓觀」詩（東一、合三）の題下注「秦始皇始立老子廟於觀南、晉惠始修此觀。（秦始皇始めて老子廟を觀南に立て、晉惠始めて此の觀を修む）」では、建物の建設・修復が誰によつてなされたか記録しており、

「鳳翔八觀 李氏園」（東一、合四）では「李茂貞園也。今爲王氏所有（李茂貞の園なり。今 王氏の有する所と爲る」と題下注にその所有者が記される。「徑山道中、次韻答周長官兼贈蘇守丞」詩（東五、合十）「溪南渡横木、山寺稱小徑」句の注「太平寺、俗號『小徑山』（太平寺、俗に『小徑山』と号す）」には、寺の俗称を書いている。ほかにも「陳季常所畜朱陳村嫁娶圖」詩（東十一、合二十）の句の注「朱陳村在徐州蕭縣（朱陳村 徐州 蕭縣に在り）」は、絵の中に書かれた朱陳村が徐州蕭県にあることを記録する。

#### d 風俗に関する注

また、風俗に関する注をみてゆこう。ここでは、（c）土地注とも関連するが、その土地の風俗を記したもの、また詩中に使用した方言を説明するもの、同様に俗諺を説明するものをおさめる。

「於潛令刁同年野翁亭」詩（東四、合九）の句の注「天目山唐道士常冠鐵冠。於潛婦女皆插大銀櫛、長尺許、謂之篷沓。（天目山唐道士常に鉄冠を冠る。於潛の婦女皆大銀櫛を插し、長きこと尺許、之を篷沓と謂ふ）」は、道士の冠と婦女の簪といった、彼らの服装について書かれている。

「再遊徑山」詩（東五、合十）の句の注「古語云『孤雲兩角、去天一握』（古語『孤雲 両角、天を去ること一握』と云ふ）」は、「始信孤雲天一握」句で下敷きとした俗諺を提示する。

「九日邀仲屯田為大水所隔以詩見寄次其韻」詩（東八、合十五）の句の注は「舟人黃帽、土勝水也（舟人の黃帽、土 水に勝るなり）」と、舟人の帽子の黄色は、五行思想では土の色を表しており、水に打ち勝つことができると説明する。また、「五禽言 其二」詩（東十二、合二十）「不辭脫袴渓水寒、水中照見催租瘢」句の注「土

人謂布穀為脱却破袴（土人 布穀を謂ひて『脱却破袴』と為す）と、黃州の人たちは鳥の鳴き声を「脱却破袴」と聞きなしているという。「五禽言 其五」詩（東十二、合二十）の自注では「姑惡水鳥也。俗云『婦以姑虐死故其聲云』（姑惡 水鳥なり。俗に云ふ『婦 姑の虐死するを以ての故に其の声云ふ』と）」と、「姑惡」に関する俗説を引く。

次に、蘇軾が眉州出身とすることもあり、蜀の風俗や方言についての注がいくつかあるので紹介したい。

「送筍芍藥與公擇二首 其一」詩（東九、合十六）「久客厭虜饌、枵然思南烹」句の注の「蜀人謂東北人虜子（蜀人 東北人を虜子と謂ふ）」。この注によつて「虜饌」が東北の食べ物を指していることが分かる。ここでは蜀の方言を用いることによつて蘇軾が「久客」であるために、食べ慣れない食事をしぶしぶとつていることが効果的に現わされている。

また、黃州左遷期に土地を得て畑作を行つてゐることをうたう「東坡八首」（東十二、合二十一）の、「東坡八首三」と「東坡八首 四」の二ヶ所に蜀の風俗、方言を用いたと説明する自注がある。例えば第三首の「雪芽何時動、春鳩行可膾」句の注「蜀人貴芹芽膾、雜鳩肉作之（蜀人 芹芽の膾を貴び、鳩肉を雜えて之を作る）」では蜀の食文化について述べ、第四首「毛空暗春澤、鍼水聞好語」句の注「蜀人以細雨為雨毛。稻初生時、農夫相語『稻鍼出矣』（蜀人細雨を以て雨毛と為す。稻初めて生ずる時、農夫相語る『稻鍼出ず』と）」では蜀の方言、そして稻が生え始めたころの農夫たちの嬉しそうな言葉を注に記している。

このように、蘇軾が自らの故郷の方言や風俗を、故郷を遠く離れた地で作つた詩のなかに用い、それを自注で説明する例がみられた。この詩本文からは、蘇軾の懐郷の念がみてとれる。また農耕をうたう詩のなかに故郷の方言

を用いたことから、農耕生活が作者自身とより密接に繋がっていたことがわかる。

#### e 文物に関する注

つぎに、文物に関する注を挙げる。ここでは主に碑文や銅器などに記された文字に関する書かれた自注を挙げたい。

「鳳翔八觀 詛楚文」詩（東一、合四）の題下注には「詛楚文碑獲於開元寺土下、今在太守便廳。秦穆公葬於雍橐泉祈年觀下。今墓在開元寺之東南數十步、則寺豈祈年之故基耶。淮南王遷於蜀、至雍、道病卒。則雍非長安、此乃古雍也。（詛楚文碑は開元寺の土の下より獲え、今 太守の便廳に在り。秦穆公 雍橐泉の祈年觀の下に葬らる。今墓は 開元寺の東南數十步に在り、則ち寺 豈に祈年の故基なるか。淮南王 蜀に遷ざるるに、雍に至りて、道に病みて卒す。則ち雍は長安に非ず、此 乃ち古雍なり。）」と、碑の出土場所・現在の所蔵、そして寺の位置、かつての地名などの情報が記され、土地注とも関わる内容が見られる。

また、碑文などに用いられた文字についての言及もある。「胡穆秀才遺古銅器。似鼎而小、上有兩柱、可以覆而不蹶。以為鼎則不足。疑其飲器也。胡有詩、荅之」詩では、古い銅器に書かれた文字について「不如學鷗夷盡、日盛酒真良計」句の注で「有古篆五字、不可識（古篆五字有り、識るべからず）」と篆字が刻まれていて読めなかつたという。「鳳翔八觀 石鼓」詩（東一、合四）では、「我車既攻馬亦同、其魚維鯉貫之柳」に注して「其詞云『我車既攻、我馬既同』又云『其魚維何、維鯉維鯉。何以貫之、惟楊與柳。』惟此六句可讀、餘多不可通。（其の詞に『我が車既に攻め、我が馬既に同<sup>あ。</sup>る』と云ふ。又『其魚 維れ何ぞ、維れ鯉 維れ鯉。何を以て之を貫く、惟

楊と柳と』と云ふ。惟此の六句読むべくも、余は多く通ずべからず」と、石鼓に書かれた詞を下敷きにして作詩したこと、その六句以外は意味が通じずに読めなかつたことが書かれている。

#### f 典拠に関する注

また、典拠注についてみてゆきたい。ここでは、(b) 他者に關する注で取りあげなかつた、蘇軾以前の古人に關するもの、特に彼らの詩文に據つたことを示すものを分類した。

「今年正月十四日與子由別於陳州。五月子由復至齊安。未至以詩迎之」詩の「早晚青山映黃髮、相看萬事一時休」句の注「柳子厚『別劉夢得』詩云『聖恩若許歸田去、黃髮相看萬事休』（柳子厚『劉夢得に別る』詩に云ふ『聖恩』若し田に帰り去るを許さば、黃髮相看て万事休まん）」では柳宗元の詩句、「除夜病中贈段屯田」詩（東六、合十二）の「歲暮日斜時、還為昔人歎」句の注「樂天詩云『行年三十九、歲暮日斜時』（樂天の詩に云ふ『行年三十九、歲暮 日の斜く時なり』）」は、白居易の詩句を下敷きにしたことを示している。ほかにも「用王鞏韻送其姪震知蔡州」詩（東十六、合二十七）「我客二子間、不復尋諸孫」句の注「子美詩云『權門多噂沓、且復尋諸孫』（子美の詩に云ふ『權門 噂沓多く、且つ復た諸孫を尋ぬ』）」では杜甫の詩句から、「再用前韻」詩（東十六、合二十七）「願求南宗一勺、水往與屈賈湔餘哀」句の注「韋應物詩云『水性本云靜、石中固無聲。如何兩相激、雷轉空山驚。』（韋應物の詩に云ふ『水性 本 静かなりと云ひ、石中 固より声無し。如何ぞ両つながら相激し、雷轉 空山を驚かす』と）」では韋應物の詩句からだと典拠を示している。

また、「洞霄宮」詩（東五、合十）「青山九鎖不易到、作者七人相對間」句の注「論語云『作者七人矣』今監宮凡

七人（論語に『作者 七人』と云ひ、今 監宮 凡そ七人）では『論語』に基づくことを指摘し、「病中獨遊淨慈、謁本長老。周長官以詩見寄、仍邀遊靈隱。因次韻答之」詩（東五、合十）「覓心地要知、何處是無還」句の注「楞嚴經云『我今示汝無所還地』（楞嚴經に云ふ『我 今 汝に無所還の地を示す』と）」は仏典の『首楞嚴經』に基づくことを指摘する。

### g 音釈に關する注

類音、平仄、四声に関するものをここに分類した。ただし、音釈の注はその用例が少なく、「十七日自陽平至斜谷宿於南山中蟠龍寺」詩（東一、合四）「橫槎晚渡碧澗口、騎馬夜入南山谷」句の「谷」の音を説明し、「音浴」というような注がほとんどであるので、今回は特に言及しない。

これまで分類してきたものの中には、単なる備忘録やメモ書き程度の注が多く含まれる。しかし、蘇軾のみが知り得た情報を記したものは、第三者である読者を意識し、彼らの読解の助けとなるように注を付したものであると考えてよいだろう。特に、蘇軾と交流のあつた人物の背景を踏まえて作詩したと書かれている注や彼らの詩を典據としたことを記録しているものの中には、その傾向がみられる。

### 三・自注の新展開

これまで挙げてきた自注内容は、蘇軾以前の詩人が記録してきた自注とほぼ同様の、簡潔な内容が記されたもの

が中心となる。しかし、蘇軾の自注の中には、自注の中に記された内容が多岐にわたり容易に分類しがたいものや、その注を付すことによって単なる備忘やメモ程度の情報の補足に留まらず、読者に作者の心情とより結びついたものがある。このように新しい内容が書かれた自注を検討してみよう。

## (二) 情報が複雑化した注

自注の中にいくつかの情報が含まれており、単純に内容分類しがたい注についてみてゆきたい。

蘇軾が鳳翔府の簽判を務めていた頃の作、「壬寅二月、有詔。令郡吏分往屬縣、減決囚禁。自十三日受命出府。至寶雞・虢・郿・盩厔四縣。既畢事。因朝謁太平宮、而宿於南谿谿堂。遂並南山而西。至樓觀・大秦寺・延生觀・仙遊潭。十九日廻歸、作詩五百言、以記凡所經歷者、寄子由」詩に付された、十一個の自注のうち、音注と、「惟有泉旁飲、無人自獻酬」句の注「昔與子由遊蟆培、時方冬、洞中溫溫如二三月。(昔子由と蟆培に遊び、時方に冬、洞中 溫溫として二三月の如し)」で示される過去回想の二つを除いたものには、蘇軾の十三日から二十日までの旅程が記される。以下に、その九つの注を挙げてみたい。<sup>(6)</sup>

十三日、武城鎮に宿す。即ち俗に謂ふ所の石鼻寨なり。孔明の築きし所と云ふ。是の夜 二鼓、宝鷄 火作り、相去ること三十里にして 武城に見ゆ。

十四日、宝鷄より行きて虢に至る。太公の磻溪石 県の東南十八里に在り、猶ほ竿を投げ餌に跪き、両膝の著く所の処有ると聞く。

十五日、郿県に至る。県 董卓の城有り。其城 長安を象り、俗に之を小長安と謂ふ。

是の日の晩、郿より起ち、青秋鎮に至りて宿す。道に 太白山を過ぎる。相伝へて云ふ「軍行 鼓角を鳴らして山下を過ぐれば、輒ち雷雨を到す」と。山上 泗の甚だ靈なる有り、今歳の旱を以て、方に之を取らんと議す。

十六日、懿屋に至る。山に近く地美なるを以て、氣候殊に早し。県に 官竹園有り、十數里 絶へず。

十七日寒食、懿屋より東南に行くこと 二十余里にして、太平宮の二聖の御容に朝謁す。此宮乃ち太宗皇帝の時、神有り 道士 張守真に降り、以て受命の符を告げ、為に立つる所なり。神を翊聖將軍に封じ、殿有り。

是の日、懿宮の張守真と舟を南溪に汎べ、遂に溪堂に宿す。

十八日、終南に循つて西す。県尉 甲卒を以て送らる。或ひと云ふ「官竹園に近きは 往往 虎有り」と。

是の日、崇聖觀に遊ぶ。俗に謂ふ所の樓觀なり。乃ち尹喜の旧宅なり。山脚に授經台の尚ほ在る有り。遂に張守真と同じく大秦寺に至り、早に食して別る。太平宮の道士 趙宗有有り。琴を抱いて送らる。寺に至り、鹿鳴の引を作して、乃ち去る。又西して延生觀に至り、觀の後 小山に上れば、唐の玉真公主 道を修するの遺迹有り。山を下りて西し、行くこと 十数里、南のかた黒水谷に入る。谷中に潭有り、仙遊潭と名づく。上

に 寺三つ有り。峻峯に倚り、清渓に面かう。樹林深翠、怪石 勝げて數うべからず。潭水 繩を以て石に縋ること數百尺、其の底を得ず。瓦礫を以て之に投すれば、翔揚として徐ろに下り、食頃にして乃ち見えず。其の清澈なること此の如し。遂に中興寺に宿す。寺中に玉女洞有り、洞中 飛泉の甚だ甘き有り。明日、泉二鉢を以て帰り郿に至る。又明日、乃ち府に至る。

これら九つの注のうち八つには、一つの注の中に、日付や訪れた地名、付近の名所やその伝説、移動中の出来事などが書き記され、単純に内容で分類しかねるような詳細な記録がみられる。

また、本来ならば自注とは詩の補足を目的とするため、自注だけでは一体何を説明するのかは分かりかねる。したがつて同じ詩に付されているからといって、自注だけを列挙しても意味は繋がらない。しかしこの九つの自注は、冒頭に日付と場所がそれぞれ記されているために、詩本文がなくとも、列挙された自注をみるだけで蘇軾の旅程や見聞が理解できるようになつていて、特殊な例ではあるが、これまでの自注に比べてより複雑な内容が記されていることから、蘇軾が詩に書き留めきれなかつた情報を自注に記録して残そうとしていたと考えられる。この詩が弟の蘇轍に寄せたものであることから、これらの注は自身の備忘や第三者を意識した注であると同時に、蘇轍に向けた注でもあつたと考えられよう。自分の出張先での見聞を、遠く離れた地にいる弟に伝えるために付されたのではないだろうか。このような旅日記のような自注は、歐陽脩の『干役志』などの当時資料として残りつつあつた日記文学とも関連があるのでないだろうか。<sup>(6)</sup>

### (二) 詩の内容を深める注

次に、作者の心情がより深く結び付いた自注を挙げる。

王介の死に則して作られた「同年王中甫挽詞」詩の末尾に付された自注、

仁宗朝賢良十五人。今惟富鄭公、張宣猷、錢純老、及余與舍弟在耳。

仁宗朝 賢良十五人。今 惟だ富鄭公、張宣猷、錢純老、及び余と舍弟在るのみ。

は、第一句の「先帝親取十五人」を説明したものである。先帝の仁宗に選ばれた十五人が誰かをただ名前の列挙で示すのではなく、今となつてはもうたつた五人しか残つていないのでいい、同年の王介の死に対する深い悲しみがほのめかされている。すでに詩のなかで「出處陞沉十年後、死生契闊幾人存」と、今となつては死別したもの多く、誰が今生き残つているのだろうかと言つているが、自注の形をとり「今惟富鄭公、張宣猷、錢純老、及余與舍弟在耳」と記すことによつて、彼を失つた蘇軾の寂しさが詩に付け加えられ、賢良に挙げられた十五人が皆存命だつた頃との対比が際立つている。

以上本節で述べてきたように、これらの注は、備忘のための情報を記した注と比べて、蘇軾がより意識的に付した自注であると考えられる。このように、本文に書ききれなかつたことを詳細に書き記した自注や、自分自身の心情を色濃く述べた自注を詩に施すことにより、詩の中に描かれた内容を一層効果的に読者に伝えようとしたのである。

#### 四・おわりに

詩人は自分の表現したい内容を表現しうる詩語を選び配置して、詩の中に収めようとする。また詩本文に収まらなかつた制作背景などの情報は、例えば題や序に示される。それでもなお、こぼれ落ちてしまつた情報は自注の形で補足的に付加される。

基本的に自注は、詩を補うためのものである。今回蘇軾の自注を検討するなかで、簡単に詩語を説明するものが中心ではあるが、これまでの自注と比べて、自注によつてより多くの情報を残そつとするものや、自注の役割を効果的に使用するものがみられた。ここから、蘇軾が意識的に自注を活用しようとしていたと推測できるのではない。

#### 注

- (1) 赤井益久「自注の文学——『元氏長慶集』を中心として——」(『中國古典研究 第四十七號』中國古典學會 二〇〇二年十二月)
- (2) 『東坡集』(古典研究会叢書 漢籍之部 第十六卷 古典研究會 汲古書院 一九九一年九月)。また、蘇軾自注の訓読について、小川環樹・山本和義『蘇東坡詩集 一』(筑摩書房 一九八三年二月)・『蘇東坡詩集 二』(出版社同上 一九八四年五月)・『蘇東坡詩集 三』(出版社同上 一九八六年八月)・『蘇東坡詩集 四』(出版社同上 一九九〇年九月)・小川環樹注『蘇軾 上』(岩波書店 一九六二年三月)を適宜参考した。
- (3) なお、『東坡集』の小字注のうち、収録された蘇軾の詩と慎長老の詩に題下注が一つずつある。
- (4) また、題下に記された小字に関して「次韻」、「三首」、「絶句」など、例えば『蘇文忠公詩合註』(馮応榴輯訂 中文出

- 出版社一九七九年五月)では題として扱われている場合があり、題の一部なのか自注なのか曖昧で判断がつきにくいものがある。また「并引」、「并敍」について今回は言及しない。
- (5)これらの注の区分は便宜的な物であり、この項目に分類できない物も多く存在するが、今回は割愛する。
- (6)原文は割愛し、訓読のみを挙げる。
- (7)宋代日記文学については、岡本不二明「宋代日記の成立とその背景——歐陽脩「于役志」と黃庭堅「宜州家乘」を手がかりに——」(『唐宋の小説と社會』汲古書院二〇〇三年十月)を参照した。

(大学院博士後期課程学生)

## 摘要

关于苏轼的自注

山 上 惠

本稿主要是对北宋诗人苏轼的自注进行分类和检讨。

苏轼自编的《东坡集》中诗的自注，根据其内容可以分为以下七类。

(a) 有关苏轼自身的注 (b) 有关他人的注 (c) 有关地方的注 (d) 有关风俗的注 (e) 有关文物的注 (f) 有关典故根据的注 (g) 关于发音注释的注

在这些题注中，包含了很多属于备忘录或是简单的要点记录似的诗语说明等的内容。可是在对苏轼自注的分类中，能够发现，自注中记录的情报有呈现复杂化并涉及多方面的内容从而难于分类。同时附加自注的行为，并不是停留在单纯的情报的备忘记录和要点记录上，亦能够看到有的自注与作者的心情密切关联，从而进一步加深了诗的内容。

象这样的自注，与记录内容简单的自注相比，可以认为是苏轼有意识附加的。通过对诗作本文中未能言尽的东西进行详细的自注记录、或是附加叙述作者自身心情的题注，试图增强诗中所描述的内容向读者传达的效果。